

## フィーリングワーク入門：感覚の多様性を呼び覚まそう

著者	広瀬 浩二郎
雑誌名	世界思想
巻	37
ページ	1-4
発行年	2010-04-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/4513">http://hdl.handle.net/10502/4513</a>

# フイーリングダワーク入門

——感覚の多様性を呼び覚ませよう

広瀬 浩二郎

ヘレン・ケラーの再評価

二〇〇九年八月〜十一月、国立民族学博物館において企画展「点字の考案者ルイ・ブライユ生誕二〇〇年記念『…点天展…』」が開催された。一三歳の時に失明し、以来三〇年近く点字を使っている僕は、視覚障害の当事者として、さらには障害者文化を研究する人類学者として本展の企画・運営に携わった。展覧会には著作や講演と異なる魅力がある。今回も小学生、外国人などを含む老若男女が企画展会場を訪れた。もちろん、常設展示場内の通路として企画展を横切るだけという人もいるが、中には点字や視覚障害分野に関心のない健常者（見常者）が珍しい展示物に引かれて立ちどまるケースも多数見受けられた。僕たちに「モノの力」を実感させてくれるのが展覧会である。とはいえ、点字は見た目のインパクトが弱い。白い紙に解読できないボツボツが書かれていても、一般来館者に興味を持つ

てもらふことは難しい。どうすれば、常設展の延長でふらりと企画展会場を通りかかった来館者の足を止めることができるのか。これは展示資料を収集・選定する段階からの重要テーマであった。「点字」視覚障害者用の特殊な文字」という固定観念を打破し、点字の楽しさと奥深さを伝えることを狙いとした本展が成功するかどうかは、視覚障害関係者以外的一般来館者にどこまでアピールできるかが鍵だった。

企画展のイントロダクションとして僕が選んだ展示物は、ヘレン・ケラーの点字蔵書である。点字を使用していたもつとも有名な人は誰かと訊かれれば、おそらく多くの人がヘレン・ケラーの名を挙げるだろう。彼女が実際に手を触れて読んでいた点字本、百余年前の古ぼけたボツボツは、僕が予想した以上の「モノの力」を発揮してくれた。ヘレン・ケラーの蔵書を米国から借用して日本で初公開するというところで、マスコミの取材

も相次いだ。また、一〇月―十一月には東京など各地で『奇跡の人』が上演され、その関係でヘレン役、サリヴァン先生役の女優さんが企画展を見学するという嬉しい出来事もあった。ルイ・ブライユには少し申し訳ないが、展覧会の導入としてヘレンを登場させた演出効果は大きかったようだ。

主演女優の民博来館後、『奇跡の人』上演パンフレットにヘレン・ケラー論を書いてほしいというありがたい依頼が舞い込んだ。従来、ヘレンは見えない・聞こえない・喋れない三重苦を克服した「奇跡の人」として尊敬されてきた。僕はヘレン・ケラーの専門家ではないが、原稿執筆に当たって彼女の生涯、『奇跡』についてじっくり考えてみた。

もともと原題の *The Miracle Worker* とは奇跡を起こした人という意味であり、舞台ではサリヴァン先生の献身的な教育の意義が強調されている。しかし、なぜか日本ではすっかり「奇跡の人」ヘレン・ケラー」というイメージである。判官びいきなどとも共通する心性なのか、日本人は「障害を乗り越える」「ハンディキャップに負けず頑張る」「ストーリーを好む。視覚も聴覚も「使えない」ヘレンが懸命に努力して、米国最難関の大学にパスし、社会事業家となって活躍する。三つのマイナスを抱えるヘレンが、五体満足の健常者でもなかなかできないことを成し遂げる。その苦難と栄光の生涯が、とりわけ日本では「奇跡」として賞賛されるのである。

音声による情報入手が困難なヘレンにとって、教養を身につ

ける最大の、そしてほとんど唯一の方法は点字を読むことだった。一〇〇年以上も前、点字本がきわめて少ない時代に大学で勉強した彼女の苦労は想像を絶する。だが、彼女の奮闘を「奇跡」として解釈するだけでは新たなヘレン・ケラー論は生まれない。僕は上演パンフレットで「触覚の可能性を拓いた先駆者」としてヘレンを再評価することを提案した。

『奇跡の人』のクライマックスでサリヴァン先生はヘレンの手を取り、井戸のポンプから流れる水にさわらせ「water」と指文字で綴る。ここでヘレンは世の中のあらゆる物に名前があることを悟る。いわば彼女は触覚で世界を認識したといえよう。ヘレンが視覚と聴覚を「使わない」代わりに触覚の潜在力を極限まで追求したことこそ、「奇跡」と呼びうるのである。「使えない」(マイナス)から「使わない」(プラス)への発想の転換は、テレビやインターネットなどによる情報に支配された視覚優位の現代社会にあって、感覚の多様性を再考するきっかけともなる。

ヘレン・ケラーは究極の触覚人間だが、視覚を「使わない」ライフスタイルに立脚し独自の触覚文字を創造したのが、彼女の先輩ともいえるルイ・ブライユだった。企画展「…点天展」では触覚にこだわる各種関連ワークショップを行なった。…では触覚にこだわる各種関連ワークショップを行なったが、参加者が自己の「さわる力」の豊かさに気づく小さな「奇跡」の場に立ち会うことができた。点字の展覧会といえ、マイノリティである視覚障害者への理解促進という福祉の文脈で

とらえられがちだが、じつは誰もが共有する触覚（五感）の可能性を切り開くための壮大なる実験であったことを僕自身あらためて感じている。

フィーリングワークとは何か

僕にとって〇九年は「触文化」（さわって知る物のおもしろさ、さわらなければわからない事実）を理論化し、広く一般社会に普及するという意味で記念の年となった。理論化というにはいささか未熟だが、拙著『さわる文化への招待——触覚でみる手学問のすすめ』（世界思想社）を刊行し、その内容に基づく点字の企画展も実施した。とりあえず昨年の成果に満足しつつ、新春を迎え今後の展開をあれこれ模索している。未来に向かう試行錯誤の中で思いついた言葉が「フィーリングワーク」である。これは人類学の基本であるフィールドワーク（実地調査）を意識した造語で、「人間が本来保持している感覚の多様性を呼び覚ますための実践的研究」と定義できる。

拙著や「……点天展……」で試みた触文化の探究は、僕のフィーリングワークのささやかな第一歩という位置づけになるだろう。やや傲慢な願いかもしれないが、僕がめざすのは、サリヴァン先生がヘレンの「さわる力」を見事に呼び覚ましたように、自身が「フィーリングワーカー」となること、そして二一世紀の人類が忘れかけている感覚の多様性を開拓することなのである。さまざまな立場から感覚にアプローチするフィーリン

グワーカーの仲間を増やすことも大きな課題となろう。

フィーリングワークの将来的展望としては、五感ということも触覚以外の感覚にフォーカスすることも大切である。しかし、そもそも五感という概念で人間の感覚を五つに識別するのは、きわめて近代的な分析法だろう。たとえばヘレン・ケラーが触覚情報を自由に視覚情報・聴覚情報に変換していたように、现实生活にあつては個々人がそれぞれのスタイルで五感を交流・交換させながら、十人十色の世界観を形成するのである。このような複雑性を特徴とする感覚を五つに分けるのはナンセンスだろう。また第六感（動物的な勘）までを研究対象とするならば、五感（人間の感覚の総称としても不十分である。そこで、フィーリングワークでは「感覚の多様性」という語を用いることにしたい。

近年、博物館・美術館において視覚以外の感覚に訴える新しい展示手法が検討されるようになった。僕自身も〇九年度からの三年計画で「誰もが楽しめる博物館を創造する実践的研究」という科学研究費プロジェクトを組織している。本プロジェクトの中で最重視しているのが「さわる展示」の具体化である。期間限定の研究なので、まずは触文化をベースとしたフィーリングワークに集中することとし、副題では視覚障害者向けの体験型展示の推進を掲げた。「見学」「観覧」というミュージアムの二〇世紀的な鑑賞法とは縁遠い視覚障害者（触覚者）に注目することを手がかりとしているが、最終目標は万人の感覚の多

様性を呼び覚ますことである。

今年のプロジェクトのファイリングワークでは、青森県の三内丸山遺跡訪問を予定している。この「さわる縄文ツアー」のキーワードは、三つの「がく」（「触学」「触案」「触愕」）である。第一段階では（縄文との接触）というテーマの下、縄文土器を触学する。プロジェクトの共同提案者である小山修三氏（吹田市立博物館長・民博名誉教授）の尽力により、三内丸山の豊富な収蔵品に触れて学ぶことが可能となった。視覚障害者を含むプロジェクト・メンバーが時間をかけて土器に触学し、これまでの研究にはなかったユニークな縄文文化論を提示するのが理想だが、そこまできずとも僕たちオルジナルの縄文探訪、異文化接触ができれば幸いである。

次に第二段階では（縄文の感触）を主題としている。触学経験により自己の中に眠る「縄文的なるもの」（感覚の多様性）を刺激し、現代版の縄文土器作りに挑戦する。陶芸家の協力を得て、触覚を活かした土遊びを楽しむプログラムを準備している。プロジェクト・メンバーはアーティストではないので、どんな作品ができるのか、なんとも心許ないが、本物の縄文土器の感触が僕たちに想像力と創造力を与えてくれることを期待したい。数年後には科研プロジェクトの集大成となる（縄文の感触）作品展開催を夢想しているが、手探り状態の僕たちが触案による手応えを実体験するのが先決だろう。

ここまで述べてきた「学」と「案」の共存、相乗作用という

アイディアは、さほど珍しいものではない。そこで僕たちは第三段階として「愕」を加えることにした。三内丸山での最終ツアーは（触発される身体）である。触学と触案のインパクトにより、僕たちは自己の身体に潜む「縄文的なるもの」と出会い愕く。その触愕の感動を著作や展覧会を通じて発信していくことで、斬新なファイリングワークが完成するだろう。

かつて柳田国男は有名な『遠野物語』の冒頭において、山神や山人の伝説を語るることによって「平地人を戦慄せしめよ」と宣言した。僕たちも「誰もが楽しめる博物館を創造する実践的研究」プロジェクトで体感した触愕を客観化し、本来「縄文的なるもの」（感覚の多様性）とは万人が持つていないことを実証していきたい。現代社会を「戦慄」させるつもりはないが、平地人（健常者≠見常者）に触「がく」の醍醐味を伝えることから、ファイリングワークに根ざす新たな知のダイナミズムが生まれるような気がしている。

さあ、学んで楽しみ、愕き愕かされる大いなるファイリングワークの旅へと出発することにしよう！

（ひろせ こうじろう／国立民族学博物館 日本宗教史、障害者文化論）